



わが校の取り組み・私の工夫

第6回

「学校推薦型選抜・総合型選抜の指導」

このコーナーでは、進路指導・学習指導などさまざまなテーマで高校の取り組みや先生方の工夫を紹介する。今回のテーマは、「学校推薦型選抜・総合型選抜（推薦・AO入試）の指導」である。

新型コロナウイルス感染防止のための休校措置の影響で、年間の予定を大幅に変更せざるを得ない高校も多い

と予想されるが、ご参考になれば幸いである。

Contents

Part 1 高校教員へのアンケート結果 …… p31

Part 2 青森県立青森南高等学校 …… p33

Part 1 高校教員へのアンケート結果

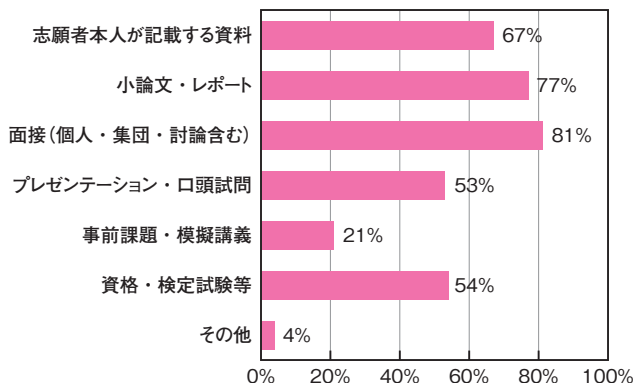
7～8割の高校で面接、小論文、志願者本人が記載する資料に関する指導を実施

今回のアンケート^(注)では2つの質問をした。まず、学校推薦型選抜・総合型選抜の指導について、実施しているものを選択肢から選んでもらったところ、**<グラフ>**のように、面接や小論文に関する指導は約8割、志願者本人が記載する資料は約7割の高校で指導しており、以下、プレゼンテーション・口頭試問、資格・検定試験は約5割となった。

さらに、各高校の取り組みについて自由記述で書いてもらったところ、昨年のガイドライン11月号「小論文・面接」（34・35ページ参照）のように、国語科などが中心の小論文指導や、担任あるいは学校全体で分担して行う面接指導に関する記述が最も多かった。さらに、志願者本人が記載する資料とポートフォリオや、資格・検定試験への取り組みに関するコメントが続く。以下、学校として複数の取り組みを行っている内容を中心に紹介する。

●小論文は、国語科が中心となって授業（学校設定科目）や個人指導で行っている。面接は、進路指導部の企画で、就職・進学の際に面接試験を受ける生徒をほぼ全教員に6～8名ずつ振り分け、教員が放課後等を利用して面接指導にあたっている。口頭試問が行われる大学を志望する生徒については、過去の傾向を参考に、当該教科に振り分けて指導している。資格・検定は、英語検定、漢字検定など、学校全体で生徒に推奨している。（検定によっては単位認定の対象となっている）

<グラフ>学校推薦型選抜・総合型選抜の取り組み (n=112)



- 志望理由書は主として担任が添削。小論文に関しては担任、国語科教員、進路部教員が指導添削。面接については、個々の大学に応じた面接を、担任、進路部教員、管理職教員が実施。プレゼンテーションや口頭試問、事前課題については、当該教科に関わる教員が個別に対応。資格検定については、英検、GTEC、漢検を全校レベルで実施。
- ①高校2年生全員に第一志望校の志望理由書について添削講座および添削結果を踏まえた講演会を実施。②面接指導は予備校講師による講演会→担任指導→校内面接担当者指導→管理職指導→予備校から派遣された講師による指導と段階別に指導。③プレゼンテーション・口頭試問・事前課題は教科担当者が個別指導。④検定は英検を毎年全員受験。
- ポートフォリオの作成のため、年度末に1年間を振り返る論文を作成。英検、漢検などの検定の学校実施、入試前の面接練習。
- 志願者が作成する資料は担任が個別に指導。面接はLHRなどの時間を使い、志望校別にグループを分けて、多くの教員が関わります。英検については2次対策面接訓練を本

(注)「Guideline特別号2020に関するアンケート」 2020年3月4日～3月18日にかけてメールで実施。全体では115名が回答。



人が希望すれば行います。

- 新規の取り組みとしては「志願者本人が作成する資料」とするため「手帳」の導入（1年）とGTECの実施（2年）。
- 個人の分析をしっかりとさせる。なぜ、その大学・学部を選ぶことになったのか、他者が納得いくストーリーになっているのかを見る。小論文の書き方を事前に全体指導し、それぞれの大学にあった形式の小論文を数本書かせ、添削指導する。プレゼンテーションは民間のシステムから過去問を引き出し、同様の質問にどう答えるか・質問者の意図は何か・なんと答えるのが正解となるのかを、生徒とディスカッションする（教師が範を示すのではない）。

2021年度入試からの変更に伴う課題 教員の負担増のほか 合格発表が遅くなることを懸念

2021年度入試からの変更に伴い、指導上の課題や困っていることについて、自由記述でご回答いただいた。

課題等として、提出書類に関連して教員の負担が増える、教員個人の力量が影響する、各種情報の提供が遅い、大学がどの程度採用するかわからないという内容のほか、合格発表の時期が遅れることにより不合格者のフォローなどについて心配するコメントも複数あった。また、未知のことで不安、まだ実際の問題認識までに至っていないといったコメントもあった。

教員の負担の増加など

- 残念ながら、今以上に煩雑で忙殺されるイメージしかわからない。まだ実際に経験していないので、漠然とした想像でしかないが、提出が求められるものの様式も大学によって異なるだろうし、時期も違ってくれば当然教員の負担増になり、きちんと指導しきれぬかどうかはかなり不安である。同じような負担は実際に受験する生徒にもかかっていく。
- 担任の力量、情報量により、可否に影響があると思うので困っています。
- 調査書・志願者本人が作成する資料をどの程度まで準備すればよいのかわからない。十分すぎる資料を用意すれば間違いはないが、「働き方改革」とセットで考えると、判断ができない。
- 出願数の増加が予想され、個別指導に手がまわりきらない。これまでの指導時期や指導内容を見直す必要がある。

大学はどの程度活用するのか？

- 調査書の書き方、分量、志望理由書、また学力をどんな形で出題されるのか。具体的に知りたいです。
- 高校入学時から取り組んできた事柄を資料として残しているとはいえ、莫大な量の資料を大学側が一人ひとり審査するのはとても困難だと考えている。現状の調査書においても、ボーダーライン上についてのみ考慮されることから推察しても、現場からすると仕事だけ増やして実際には活用

されないのではないかと懸念がある。

- 調査書の所見欄の細かい記載はどのくらい有効なのか、多少疑問に思うところがあります。多くのデータや記載があっても、数多くの受験生がいれば、資格などの客観的に扱いやすい部分を抜き出して処理するのではないのでしょうか？
- 担任は当然生徒の実態を十分考えて作成しますので、それを入試で志望校側が有効に活用してくださるのありがたいことですし、ぜひそうしていただきたい。従来のように「提出」が条件であるだけでは、どのように文書が扱われるのかが不明となります。ただ、それがあまりにも重視され過ぎて、生徒の実態とかけ離れた文書を作成されたときに生ずるリスクも無視できないと思います。いずれにせよ、送る側も受け取る側（試す側）も研究を要することだと思います。

志願者本人資料・ポートフォリオ・調査書

- 校内で、学校推薦型選抜や総合型選抜の研究が進んでいない。ポートフォリオの活用という方針は決まっているが、具体的に進路指導部から学年へと提案があるわけではないので、学年や個人ごとの取り組みに留まっている。生徒の学習記録をとることと、振り返りを行うことで生徒の自己実現を手助けする方向性について、早急に校内や学年で共通見解を持つ必要がある。
- 本人作成の資料の指導をどうするかが課題です。学校推薦・総合型選抜の生徒の指導はある程度できるとしても、一般選抜の生徒の志望理由書や学修計画の作成などは未知の指導になります。対象生徒の数も多く、今から心配です。
- 調査書の各項目の記載分量や、内容について校内で基準を設けるべきかが課題である。
- 指導要録を担任が作成する段階で学力の3要素ベースの記述になっていないので、3年担任が調査書にまとめる時に困りそう。

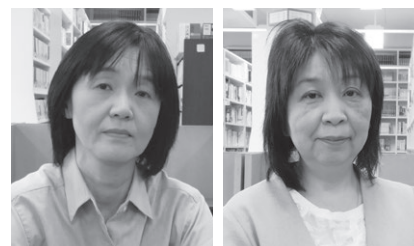
不合格者のフォロー・一般入試への対応

- AO・推薦の併願が難しくなりそうなので、7月の進路検討会・三者面談での入試方法の吟味の重要性が増しそう。（本校はこれまで、まずAOにチャレンジし、不合格だった場合、公募・指定校で再チャレンジさせるケースが多かった）
- まず日程が大きく後ろにずれることが心配。公募推薦で12月に入って不合格となった生徒は、果たして気持ちを切り替えることができるか…
- 実施時期が遅くなり、不合格になった場合は一般入試への対応が十分にできない。学校推薦型選抜・総合型選抜の出願から合格発表の期間が短くなるが、可否の審議に十分な時間を確保する余裕がないのではないかと。特に、偏差値の低い大学や地方の大学は定員確保の歩留まりが見込めないのではないかと。一般入試も危惧される。
- 実施時期がきちんと決められ全体的に遅くなっているが、すべての学校が実施時期をきちんと守ってくれるのか調査してほしい。

青森県立青森南高等学校

生徒が主体的に取り組む意識を醸成 高1からPEN活動を通じ、読み、考え、書く力を育成し 高3の2学期から小論文・面接の個別指導を実施

青森県立青森南高等学校では、高校1年生から新聞記事を読み自分の意見をまとめるPEN活動を行うなど、読み、考え、書く力の育成に取り組んでいる。また、学校推薦型・総合型選抜を受験する生徒に対しては、3年生の5月から志望者集会などを開催して徐々に意識を高めながら、志望理由書の作成など具体的な準備を進めるようにしている。一連の取り組みについて、進路指導部主任の田中祐子先生とPEN活動を推進する図書部主任の三上しげ子先生にお話を伺った。



進路指導部主任
田中祐子先生

図書部主任
三上しげ子先生

◇ 仮受験願、志望理由書提出 推薦等受験願と 段階を追って受験に対する 意識を高める

青森市内に立地する青森県立青森南高校は、生徒の約7割が4年制大学に進学し、進学者（大学・短大・専門学校等）の4割は青森県内に進学する。近年、推薦・AO入試の志願者が増加しており、2019年度の卒業生は、国公立大学・私立大学を合わせ、約130名の生徒が推薦・AO入試を受験し、うち80名が合格した。

こうした状況を受け、2019年度から、明確な志望理由を元にししっかり準備した上で推薦・AO入試を受験するように、かねてからの指導のスケジュールを早め、段階を追って準備に取り組むことにした。

2020年度の学校推薦型・総合型選抜の指導の流れは<表1>のとおりである。同校は、4月中旬から2週間程度休校したが、5月のゴールデンウィーク後から授業が再開された。そのため、5月中旬に第3学年と進路指導部の教員で第1回の進路検討会議を開催することができた。第1回では、4月に行った二者面談

の結果をもとに、生徒がどの大学、どの選抜方法での受験を考えているかについて、指定校推薦を希望する生徒の重複を含め学年全体の状況を共有した。その上で、昨年の受験状況や合格実績を踏まえて、今後の進路指導の方針を検討した。

5月中旬には、学校推薦型・総合型選抜での受験を希望している3年生を放課後に集めて、第1回推薦等志望者集会を開催した。「1回目では、入試制度の仕組みや、どのような学力や資格、準備が必要か、どのような意識を持って臨むべきかなどを説明しました。そして集会の内容を踏まえて、志望大学の選抜方法を調べ、受験について、保護者や担任と相談するように伝えました」（田中祐子先生）

保護者や担任と相談した上で、学校推薦型・総合型選抜の受験を希望する生徒は、6月末までに保護者の同意を得て「推薦等仮受験願（以下、仮受験願）」を提出する。「仮受験願」として文書を提出するのは、生徒に本当にその大学に行きたいという意志を固めさせることが目的である。そして、第3学年と進路指導部の教員は、「仮受験願」をもとに改めて生徒の志

望状況を共有し、合格の可能性などを検討する。「この結果、本人の適性、学校推薦型・総合型選抜を志望している理由によっては、面談で別の道を提案することもあります」（田中先生）

7月中旬になると「仮受験願」を提出した生徒を対象に、2回目の推薦等志望者集会を開催する予定だ。ここでは、受験に必要な書類や受験までの日程を説明する。そして集会後に三者面談を行って改めて保護者の意向と生徒の希望を確認する。学校推薦型・総合型選抜希望者は、夏休み中に各大学の指定に沿った志望理由書を書き、夏休み後に「推薦等受験願」と「小論文・面接・実技指導願（以下、指導願）」とともに提出する。「指導願」には、受験する大学の過去2年分の出題内容を自分で調べて記入する。

夏休み中に志望理由書を書けなかった場合は、学校推薦型・総合型選抜には向かないと判断して、2学期以降、小論文や面接の個別指導は行わない予定だ。というのも、「一昨年までは、推薦・AO入試の受験を決めた後で、志望理由書の作成にとりかかりましたが、結局しっかり書けないまま大学に提出して不合格にな



＜表1＞2020（令和2）年 3学年進路計画より

月	学校行事	3学年進路関係行事	
		学年全体	学校推薦型・総合型選抜関係
4	入学式・始業式 面接週間 2・3年実力テスト	第1回進路志望調査	
5	中間考査	進路検討会議① 進路参考資料説明会	推薦等志望者集会① (推薦等：学校推薦型選抜及び総合型選抜)
6	高総体 遠足 芸術教室 期末考査	学習時間調査①	
7	南高祭 球技大会 終業式 学校説明会	三者面談	推薦等仮受験願提出 推薦等志望者集会②
8	始業式 実力テスト	第2回進路志望調査 夏季集中セミナー	推薦等受験願、志望理由書等、 小論文・面接・実技指導願提出
9	運動会 中間考査	センター願書記入説明会	推薦会議 推薦等志望者集会③ 推薦等指導開始
10	マラソン大会 高総文	センター試験願書発送	
11	開校記念日 期末考査	学習時間調査②	
12	修学旅行 終業式	進路検討会議②	
1	始業式	センター試験 進路検討会議③ 三者面談	
2	学年末考査	小論文セミナー 面接・小論文指導 国公立前期日程試験	
3	卒業式 高校入学者選抜 修了式・離任式	前期合格発表 国公立中後期日程試験 中後期合格発表 進路総括会議（進路情報交換会）	

(一部を抜粋して掲載)

る生徒がいました。今のような流れにすれば、夏休み後までに志望理由書を書くことによって、改めて学校推薦型・総合型選抜を受験するのか、意志を確認するとともに、志望理由を明確にすることができます。また、受験する大学の過去2年分の内容を調べることによって、自分がこの選抜方法に向いているのかを考えることとなります。志望理由書を書いたり、出題内容を調べたりできないようでは、この選抜方法に適していないと判断します」（田中先生）

◆◆◆ 推薦会議で受験者を決定後 学校全体で小論文・面接指導 を行う

9月初めに「推薦会議」を開催して、学校推薦型・総合型選抜を受験する生徒を決める。さらに生徒の「指導願」をもとに、学部系統に応

じて、各教科に生徒を割り振り、各教科で指導を担当する生徒を決定する。ちなみに2018年度は教員1人に対して生徒2人程度であったが、2019年度は受験者が増えたため、教員1人当たり3～4人の生徒を担当した。「小論文指導は、全学年の先生に指導をお願いしています。自分が3年生の担任になったら他の学年の先生の協力を得ながら指導するという了解のもと、協力

していただいています」（田中先生）

続いて、9月中旬頃までに第3回推薦等志望者集会を開催する。第3回では、生徒に指導を担当する教員や今後の指導の流れなどを伝える。第3回以降は個別指導となり、受験する大学の選抜方法や出題内容を踏まえ、指導の時間や回数は各教員に一任される。

なお、小論文と面接は、原則として別の教員が指導を担当する。「しかし、面接で専門的な内容を問われる場合、例えば、社会科学系の学部であれば、小論文も面接も社会科の教員が指導します。ただ、そうでない場合は、教員の負担も考え、小論文とは別の教員が担当します。面接指導に関連して、志望理由書は夏休みまで担任が指導しますが、夏休み以降、面接担当の教員も指導に加わります。これは、以前、面接指導担当の教員

が指導をするうちに、生徒の話す内容が志望理由書から離れていくケースがあったためです」（田中先生）

なお、時期や教材は学年によって異なるが、2年生から3年生の初めまでに、全員が志望理由書を書くことにしている。「私が担任だった2019年度卒業生の場合、2年生の2月に志望理由書のテキストを配付して書き方を学習した上で志望理由書を書かせ、その後、志望理由書の模試を受験させました」（三上しげ子先生）。以上のような取り組みの結果、2019年度卒業生は、国公立大学は44名、私立大学は36名が推薦・AO入試で合格した。

ところで、2021年度入試から総合型選抜の合格発表の時期が11月以降になり、不合格者が一般選抜で再チャレンジする際の気持ちの切り替えや受験準備までの時間が短くなることを懸念する声もある。しかし、同校ではどの生徒も、一般選抜での受験を念頭においた指導を前提としているため、特に問題はないという。「例えば、学校推薦型・総合型選抜で受験する生徒も、放課後は、小論文や面接の個別指導より教科の講習を優先するのが原則です。また、大学入学共通テストも全ての生徒に課します」（田中先生）

こうした指導の結果、2019年度卒業生の場合、推薦・AO入試で不合格だった場合でも、一般入試で合格した生徒が多かったという。

◆◆◆ 新聞記事を読み、意見を書く ◆◆◆ PEN活動等で ◆◆◆ 言語活動を充実させ ◆◆◆ 小論文につなげる

ところで、小論文等で求められる、論理的思考力・判断力・表現力は、高校3年生の1年間だけで十分な力をつけることは難しい。そこで、同校では1年生から言語活動を充実させて

いる。その中心となるのが「PEN活動(Program or Education through Newspaper)」である。1年生から3年生1学期まで、生徒は朝自習の時間に年11～12回、PEN活動を担当する図書部の教員が用意した新聞記事を読んで、200～400字程度の意見文を書く。「記事は、環境、科学技術、医療など多様な分野からタイムリーな話題を選んでいきます。担任は生徒の意見文の中から良いものを選び、図書部の教員がとりまとめて印刷し、生徒に配付します」(三上先生)

長文を読んだ上で800字など長い文章を書く小論文指導も重要だが、まず、短い文章を読み、意見を書く経験を重ねることによって、生徒が億劫がらずに文章を読み、書けるようになることから始めている。「速読の練習にもなりますし、論理的な文章を読んだり、短い文章を書き続けたりすることによって、生徒は徐々に自分でも論理的な文章を書けるようになります。また、新聞を読む習慣がついて社会的な問題に関心を持つようになる生徒や、志望する学部に関連する新聞記事をスクラップしてまとめる生徒もいて、書くスキルの向上だけでなく、志望理由書や小論文の内容の充実につながる生徒もいます」(三上先生)

◆ 受験を終えた3年生や ◆ 大学生が講師になり ◆ 1・2年生のやる気を引き出す

また、進路指導全般にあたり力を入れているのが、1年生からさまざまな体験をさせることである。体験を通じて進路を考え、生徒自身のやる気を引き出すことを重視している。体験には、さまざまな機関が実施している高校生の看護体験、薬剤師体験などの体験イベントを活用してい

＜表2＞南ちゃん講座(第8回)実施要項より

●第1ブース	弘前大・理工・機械科学、はこだて未来大・システム
●第2ブース	弘前大・理工・地球環境防災、前橋工科大・工・建築
●第3ブース	弘前大・農学生命・食料資源、岩手大・農・応用生物化学
●第4ブース	青森県立保健大・健康科学・看護
●第5ブース	駒沢女子大・人間健康・健康栄養
●第6ブース	都留文科大・文・国文、弘前大・教育・小学校
●第7ブース	宇都宮大・国際・国際、目白大・外国語・韓国語、東洋大・国際観光・国際観光
●第8ブース	青森県立保健大・健康科学・社会福祉、東北福祉大・総合福祉・福祉心理
●第9ブース	弘前大・人文社会・文化創生

(一部を抜粋して掲載)

る。例えば、青森県の社会教育センターの「高校生スキルアッププログラム」^(注)による大学の公開講座、市民講座への参加や、ボランティア、自由課題研究等の奨励などがある。また、校内でも希望者を対象に、職業人の講話等、多様な講座を不定期に開催している。

校内の講座のうち、田中先生と三上先生が特に有意義だと感じているのが、推薦・AO入試で合格した3年生が講師となる講座である。2019年度は2020年2月に、1・2年生対象に学部系統別にブースを設けて、受験の準備や苦労について話をした<表2>。もちろん3年生に聞きたいことを質問できる。「受験という経験を経た3年生は、立派に講師として話ができます。2年生はその姿に刺激を受けて、講座後、積極的に入試の準備に取りかかる姿が見られま

す」(三上先生)

ほかに、夏休みの講習期間中に大学生に來校してもらい、大学や大学院での学びや研究について話してもらう講座も開催している。話を聞いた後は、参加者には必ず振り返りのレポートを書かせており、教員は、短い必ずコメントを書いて返却している。これも文章を書く力の育成につながっている。

このように、青森南高校では1年生からのPEN活動、3年生以降は、生徒自身が、学校推薦型・総合型選抜に自ら主体的に取り組む意識を醸成した上で、9月以降、個別指導を中心に小論文・面接指導を行っている。今後、さらに学校推薦型・総合型選抜の受験者の増加が見込まれることから、全員に対してどのような指導が可能かを検討し、小論文・面接指導の充実を図る予定だ。

青森県立青森南高等学校

◇所在地：青森県青森市西大野二丁目12番地40

◇沿革：1975(昭和50)年 青森県立青森南高等学校開校
1994(平成6)年 外国語科設置

◇学級編成：各学年普通科5クラス、外国語科1クラス

◇生徒数：男子361名、女子357名(2020年4月7日現在)

◇特色：外国語科は青森県内唯一の専門学科。「国際理解教育」を掲げ、異文化理解学習やボランティアなどの貢献活動を通じて、生徒の話す力、考える力を伸ばし、自分の才能を見つけて伸ばせるような取り組みをしている。

◇卒業生の進路：2020年3月卒業生239名

・進路：4年制大学182名、短期大学7名、専門学校24名、就職7名、その他19名
・合格者の内訳(現役生、延数)：国公立大学95名、私立大学167名、短期大学14名、専門学校等24名、文部科学省管轄外の学校6名、就職8名

(注)「高校生スキルアッププログラム」プログラムに登録して、大学の公開講座、市民講座への参加や、ボランティア、自由課題研究等の「学校外学修」を行い、1,000字程度のレポートを書くことで「単位」となる。20単位以上で「スキルアップ奨励証」、35単位で「スキルアップ認定証」が交付される。